

講演 2 湯浅龍彦 「脳はいつでも今が旬:脳とこころの姿」 鎌ヶ谷総合病院 神経難病医療センター・センター長

新たな領域に意識を拓けて行くことを「超越」と云う。脳は正しく五臓六腑から超越した存在であり、新たな概念を生み出す。その働きがこころである。脳とこころの仕組みを理解するヒントが食行動にある。そこで本講演では、食を通して見えてくる脳の姿、こころの働きを支える脳の3大ネットワーク、そして、アルツハイマー病 (AD) と糖尿病 (DM) を結ぶネットワーク、即ち腸脳連関の意義について概説する。

最初に、郷土の先人は脳とこころをどう語ったか述べる(中村 元、永井 隆、西 周、中田瑞穂、小池上春芳)。次いで、こころの3軸(第1軸:感覚・認知・知覚;第2軸:意識・注意・自我;第3軸:情動・魂)を説明する。最後に、食から見えてくるこころの核心について解説する。脳の3大ネットワークから言えることは、脳は常に現在が一番であって、残る機能のありつたけを傾注して未来を目指すオルガンである。

その中で、早期認知症とは、インスリン抵抗性がキーであることに触れ、リスク管理(運動、食餌、善玉菌、中鎖脂肪酸)の重要性、そしてインスリン抵抗性の背景に腸の炎症があるとの指摘を受けて、腸内細菌叢を正常化し、高脂肪食を避け、腸の炎症を防ぐことがADとDM共に重要であるとの認識が高まっていることを解説する。

健全な脳機能には健やかな腸の管理が大切であり、腸脳連関からは今後も目を離せない。

プロフィール 湯浅 龍彦

1964年 3月 島根県立松江北高等学校卒業
1970年 3月 信州大学医学部卒業
1982年 5月 国立療養所西小千谷病院内科医長
1989年 5月 新潟大学神経内科助教授
1992年 5月 東京医科歯科大学神経内科助教授
1995年 4月 国立精神神経センター国府台病院 部長
2006年 5月 徳島大学臨床教授
2008年 5月 神経内科津田沼顧問

【学位・所属学会】 学 位:医学博士(971号) 新潟大学
所属学会: 日本内科学会; 日本脳神経学会; 日本認知症学会
日本神経筋摂食・嚥下・栄養研究会会長
日本早期認知症学会副理事長
国立医療学会学会誌「医療」元編集委員長
日本ペーテル協会事務局長

講演3 杉本八郎 「アルツハイマー病治療開発の夢を追って」 同志社大学生命医科学研究科 客員教授

わが国の認知症の患者は2012年時点で約462万人存在し、これは65歳以上の7人に1人が認知症であることを意味します。さらに認知症予備軍である軽度認知障害(MCI)も約400万人いると推計されています。世界全体では現在約4400万人、2050年にはおよそ3倍の1億3500万人を超えると推計されています。患者の治療や介護にかかる費用は年間60兆円を越えています。社会的にも経済的にも世界的に大きな問題となっている。

今回の講演ではエーザイが世界に先駆けて開発に成功したアリセプトの開発秘話についてお話をします。しかしアリセプトは対症療法のためアルツハイマー病(AD)の進行を止めることはできません。いま私どもが研究開発を進めているのはARの根本治療薬の開発です。開発コードはGT863と言います。ADの原因はアミロイドβタンパクとタウタンパクの凝集塊が毒性を示すために発症すると言われています。GT863はこのいずれのタンパクの凝集を抑えるものです。GT863が開発に成功すれば、AD治療に多大なる貢献を果たすことは間違いなく、画期的なAD治療薬として日本の医薬品研究が世界をリードすることになります。

しかし開発に成功するまで5～7年は必要です。その間にもAD患者は発症していきます。そこで現在認知症の予防によいと言われていたことをご紹介します。なるべく楽しく、わかりやすくお話をしますのでぜひご参加ください。

プロフィール杉本八郎

【学 歴】	昭和36年 3月	東京都立化学工業高校 卒業
	昭和44年 3月	中央大学理工学部 工業化学科 卒業
【職 歴】	昭和36年 4月	エーザイ株式会社入社 研究所(合成)研究員
		筑波研究所化学系 主任研究員 同社 理事 創薬第一研究所 所長
	平成15年 4月	京都大学大学院薬学研究科「創薬神経科学講座」教授
	平成22年 4月	同上 最先端創薬研究センター客員教授
	平成24年 8月	同志社大学生命脳科学研究科教授
	平成26年 8月	山形大学医学部 客員教授
	平成28年 4月	同志社大学生命医科学研究科客員教授現在に至る
【資 格】	平成 8年 7月	薬学博士(広島大学医学部総合薬学科)
	平成17年10月	名誉博士号授与(中央大学)
【所属学会・受賞等】	日本薬学会 ; 日本認知症学会	
	平成 5年 エーザイ科学賞; 英国 ガリアン賞特別賞; 日本薬学会技術賞	
	化学・バイオつくば賞受賞; 平成14年恩賜発明賞受賞	
【趣 味】	剣道教士七段(薬業剣道連盟 会長); 俳句「風土」同人(俳人協会 会員)	

ご挨拶

第 19 回日本早期認知症学会学術大会大会長 関西福祉科学大学 重森健太

この度、平成 30 年 10 月 6 日 7 日の 2 日間、第 19 回日本早期認知症学術大会を松江市で開催することになりました。本大会は「エビデンスに基づいた脳の診方、鍛え方」というテーマを掲げ、認知症の早期発見に関わる医学的知見だけでなく、認知症予防の最新技術を整理し、運動・栄養・生活習慣の側面からその効果を検証いたします。

また、学術的側面のみならず、大会 2 日目（10 月 7 日）には、松江市や松江医師会と協力しながら認知症に関する知識啓発を目的とし、市民参加型の公開セミナーを企画しました。午前中は「さあ出かけようテルサへ ～知る、測る・試す、相談する～」と題して、医療相談会、認知機能検査測定、ロボットスーツ体験会、ギャートルズ展示会、お茶会等の地方創生イベントなどが盛りだくさんあります。午後は、「脳とところを未来に繋ぐ」をテーマとし、3 名の専門家を招聘し、松江の文化の礎を築いた不昧公の茶のころ、脳の仕組みとところ、そして、認知症治療薬開発秘話と将来展望をお話しして頂きます。ぜひ多数ご参加いただき、皆で認知症にならないための準備をしてみませんか？ たくさんの方々のご来場を心よりお待ちしております。

松江市長 松浦正敬

日本早期認知症学会の第 19 回日本早期認知症学会学術大会が、ここ松江市において盛大に開催されますことに、心よりお祝い申し上げますとともに、全国から当市にお越しいただきました会員の皆様を歓迎いたします。

本学術大会では、早期認知症の診断及び予防、治療の研究と実践の向上を目的とした学術的な側面と専門性を活かされ認知症を早期に予防する啓発事業として、学会と松江市医師会や行政とが協働して市民講座を開催するなど、新運営にも挑戦されています。

本市におきましては、団塊の世代が 75 才以上となる 2025 年には高齢化率は 31.2% まで上昇し、高齢者の 5 人に 1 人が認知症有病者になると見込んでおり、「認知症対策の強化」を重点施策として掲げて、認知症の方やその家族の支援に取り組んでいます。この度の日本早期認知症学会の活動を通じ、多くの市民に認知症の早期予防に対する意識を高める良い機会となることを期待しています。

さて、松江市は、本年 4 月に中核市に移行し、中海・宍道湖・大山圏域の中心的な都市として、地域の産業・経済を牽引していく役割を担うとともに、国宝松江城をはじめとする史跡と伝統文化に育まれ、また、宍道湖や日本海に面した大山隠岐国立公園に囲まれた国際観光都市であります。今年、不昧公二〇〇年祭として、松江城では記念茶会を開催しておりますので、皆様には是非お立ち寄りいただけたらと思います。

松江市医師会長 泉 明夫

この度、大名茶人と謳われている不昧公（松江城第7代当主、松平治郷）没後200年という記念すべき年に、第19回日本早期認知症学会が松江市で開催されますことを心よりうれしく思うとともに、関係各位皆様の多大なるご尽力に深く感謝申し上げます。

認知症患者の数は、2012年時点で約463万人と推計され、2025年には700万人を超える予想され、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症に罹患するといわれています。未曾有の高齢化社会が進む中、認知症対策は社会全体の重要な課題であります。

松江市医師会では、認知症対策を地域包括ケアシステムの一環として、認知症サポート医を中心に、市民の皆様に対して認知症の啓蒙活動、市民公開講座や地域での講演会などを通して認知症の予防、治療、対応などについて理解を深めていきたいと考えています。

この度の市民公開講座は、日本早期認知症学会、松江市、松江市医師会の共催で開催され、第一部は「知る、測る・試す、相談する」をスローガンに認知症の相談会、第二部は「脳とこころ」を未来に繋ぐ、をテーマにしてご講演があります。

認知症を身近な問題として考える良い機会であります。できるだけ多くの市民の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本早期認知症学会 理事長 浜松医科大学 副学長 宮嶋裕明

この度の松江大会にあたり、市民公開講座にご参加くださいました皆様に慎んで御礼申し上げます。近年の日本は高齢化が加速度的に進み、認知症は社会全体が抱える大きな課題になりました。早期認知症学会は、(1)認知症発症の初期段階での診断、治療、ケア・介護の早期介入、発症前の危険因子・予防について研究する、(2)医学・薬学・看護学・工学・心理学・健康社会学などの基礎研究職、医療・看護・リハビリテーションなどの医療専門職、栄養・介護・福祉などの専門職、行政職など様々な分野の会員で構成された、(3)大都市よりは地方に活動拠点を置く、市民サイドの学会です。

今回の開催地、松江は日本人のこころの基本となる文化の発祥地であり、多くの脳科学の巨人を輩出した地でもあります。認知症の未来を予測する一番良い方法はすぐには思いつきません。でも、この公開講座に参加した皆様が自分で未来を創ること、なのかもしれません。

結びに、会長の重森健太先生、副会長の中島健二先生、松嶋永治先生をはじめ、関西福祉科学大学の皆様、また、松江市、松江医師会など関係の皆様のご尽力に敬意を表するとともに深謝申し上げます。

■第19回日本早期認知症学会（松江大会）大会組織委員会

大会長	重森健太（関西福祉科学大学）
副大会長	中島健二（松江医療センター）
副大会長	松嶋永治（まつしま脳神経内科クリニック）
準備委員長	名倉達也（掛川東病院）
実行委員長	岡本加奈子（関西福祉科学大学）
大会事務局	
財務部長	中俣恵美（関西福祉科学大学）
総務部長	金原一宏（聖隷クリストファー大学）
庶務部長	大杉紘徳（城西国際大学）
渉外部長	合田明生（京都橘大学）
大会運営局	
運営部長	橋村康二（島根リハビリテーション学院）
管理部長	山本圭彦（リハビリテーションカレッジ島根）
庶務部長	太田珠代（出雲看護専門学校）
学術局	
学術部長	安間稔康（掛川東病院）
レセプション	
運営部長	渡辺 剛（松江赤十字病院）
相談役	湯浅龍彦（鎌ヶ谷総合病院 千葉神経難病医療センター）
統括顧問	大城昌平（聖隷クリストファー大学）

山陰合同銀行は社会貢献活動・環境保全活動に取り組んでいます

独自性のある地域貢献モデルを地域とともに創っていきます。

社会貢献活動

障がい者の自立支援・社会参画支援 2007年～

障がい者を積極的に採用、自立を支援

ごうぎん
チャレンジまつえ
(2007年9月開設)

- ・知的障がい者が専門的に就労
- ・「ゆめいくワークサポート事業」により、地域の障がい者就労を支援

ごうぎん
チャレンジとっとり
(2017年9月開設)

- ・精神障がい者・発達障がい者が主に就労
- ・銀行事務業務を担い、今後活動を拡大
開設当初、雇用者数 5名 → 20名程度へ



私塾「尚風館」の運営 2012年～

思考力や洞察力を養い、大局に立って決断できる人材を育成

- ・「ごうぎん島根文化振興財団」が運営する私塾「尚風館」の活動拡大
- ・高い志を持って将来的に社会のなかで活躍できる人材の育成を目指す



環境保全活動

排出権取引支援 2010年～

カーボン・オフセットの提案を積極的に推進

- ・「鳥取県」「日南町（鳥取県）」「養父市（兵庫県）」からJ-クレジット地域コーディネーターに認定
- ・積極的なJ-クレジットの販売支援、売買契約仲介により、企業の環境活動を支援するとともに、低炭素社会の実現を後押し

2018年5月、当行が支援した鳥取県内でのJ-クレジット販売量が1,000t-CO2を達成。
実績が認められ、当行に対して鳥取県から「J-クレジット 1,000t-CO2達成の証」を、日南町・日南町森林組合から「感謝状」をそれぞれ頂きました！



森林保全活動 2006年～

森林を守り育み、次代に伝えていく活動を展開

- ・役員や家族による森林保全活動
- ・ボランティア団体やNPO法人のネットワーク「森林を守ろう！山陰ネットワーク会議」との情報交換、活動支援
- ・「日本の森を守る地方銀行有志の会」を通じた活動



SAN-IN GODO BANK